

---

# 浅神莊の奇想天外なウワサ！

ちひろの

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

浅神荘の奇想天外なウワサ！

### 【NZコード】

N9108X

### 【作者名】

ちひろの

### 【あらすじ】

猫の神様、ひきこもりの宇宙人、人気漫画家、元傭兵、謎の起業家。“変わった”住人が暮らすことで有名なアパート浅神荘は今日も何かと騒ぎを起こしている。一条拓海はごく普通の高校生だが、わけあってその浅神荘で暮らしていた。夏休みの前日、拓海はクラスメイトの東雲さつきに思い切って告白するも、あっさりと振られてしまう。しかもその一部始終を住人に盗聴されていたものだから、傷は抉られる一方だ。だがそんな折、浅神荘の大家である竜一が新しい管理人を連れてくる。それはなんと東雲さつきだった。自分を

振つたばかりの少女と、奇抜な住人たちとの同居生活が今始まる  
。（現代ラブコメですが、ファンタジー・SF要素も含まれる予  
定です）

蝉時雨の空にうわずつた声が響いた。

「好きです東雲さん。僕と付き合つて下さい！」

それは一条拓海にとつて、一世一代の告白だった。

頭を下げ、固く拳を握り、破裂しそうな鼓動を胸に抱きながら、彼はクラスメイトである東雲さつきの返事を待つた。練習に励む運動部の掛け声が、すぐそばのグラウンドで響いている。屋上から聞こえる下手くそなラッパの音色が、名投手の三段ドロップよりしく変化していた。

一学期の終わり。長い夏休みを明日に控えた終業式の放課後。彼は体育館裏の草むらに彼女を呼び出していた。日陰が油照りの太陽を遮ってくれているが、本格的な夏を迎えた昼下がり、炎暑はまったくの遠慮知らずだった。

彼の鼻先から汗粒が落ちる。緊張の一滴が下草に消えた。

十秒以上過ぎたが、彼女の返事はない。

おそるおそる拓海が顔を上げると、冷然とした面持ちがこちらを見ていた　いや、睨んでいた。

鳥羽色の長髪を風にそよがせ、凜とした容貌がまっすぐに拓海を捉えていた。処女雪のように真っ白な肌。日々のトレーニングで鍛えられ、引き締まった四肢。彼女の風体は、まるで武士のそれだった。たつた今、異性に告白された恥いや照れは微塵もない。

ダメか……拓海は諦念した。

初めから結果はわかつていた。

成績は常に上位。剣道の腕前は全国レベル。容姿端麗で文武両道を貫く彼女は、校内での人気も高い。彼女は高嶺の花なのだ。

反対に拓海はといえば、ぱつとするところのない高校一年生。中性的な容姿はどこかひ弱で、背も高い方ではない。成績は下の上で、帰宅部の皆勧賞。どこにでもいる男子といえばまだましだが、要す

るに何一つ取り柄がない。

無謀。

ただその一言に及ぶ。

一条拓海が東雲さつきに懸想するなど、鶏の卵を孔雀に孵そうとするようなものだ。二人は人間としての質がまるで違う。ふとした偶然で、同じ高校の同じクラスにいられただけの関係に過ぎない。

「ごめん……やっぱ、ダメ……だよね。僕なんか……  
ぎこちない笑みに生氣はない。

逃げたい。

ただその欲求だけがあった。

逃げ出したい。

他の生徒に知られたくない一心で、ひと氣のないこの場所を選んだ。もたもたしてると見つかってしまうかもしれない。

拓海はきょろきょろと周囲を確認する。

知られたくないかった。

自分などが彼女に告白したこと。

振られることを織り込んで、わざわざ夏休み前に想いを告げたことなど。

「嫌い」

冷淡な一言が鼓膜に触れた。

「…………え」

確かめるまでもなく、それは東雲さつきの声だった。

彼女は柳眉を不快にひそめ、まるでアスファルトに貼り付いたガムを見るような目で拓海を見ていた。

「あなたはどうしてそんなに卑屈なの？ 私、一條くんみたいに心の弱い人、大嫌い」

苛立ちを放擲し、彼女は颯爽と艶髪を翻した。彼女は何も言わず、そのまますたすたと去つて行つてしまつ。

呆然と立ち尽くし、少女がいたはずの場所を見つめる。

大嫌い。

心が痛む。予期していた結果なのに、いざ本心を告げられるとうしょもなく胸が軋んだ。張り裂けそうな痛みは、心の内を刺す針だ。

言わなければよかつた。

激しい後悔が血液と共に体中を巡った。だが彼は、持ち前の気弱さでその精神を持ち直す。

「どうせ……僕のことなんて忘れられるわ」

彼女は拓海のことをどうとも思っていない。

彼女にとつて今日という日は、やがて変哲のない過去になる。長い夏休みが明けたら、またただの他人に戻る。一いちからは話しかけない。向こうから話しかけてくることもない。

拓海は死んだような目で顔を上げた。

幸い、当事者以外の誰もこの告白のことを知らないのだから。えー、テスト放送。ただいまマイクのテスト中、オーバーその時だつた。巨大なハウリングと共に校内放送が響いのだ。スピーカーから漏れる男の声が、運動部のいるグラウンドに、まだ教師や一般生徒が残る校舎内に、そして拓海の立つ体育館裏に反響していた。

「テスト放送……？」

拓海は渋面した。それにしては趣が違う。男の口調はひどく乱暴で、教師のものとは程遠い。放送委員の生徒でもなかつた。しばらくすると、また放送が鳴つた。

あー、今からこの校内放送はわれわれ浅神荘あさがみそうがジャックした。抵抗はまつたくの無駄だ。オーバー

その言葉に学校中が騒然となつた。グラウンドの掛け声は止み、下手くそなラップも聞こえない。かわりにどよめきが始まる。浅神荘 その単語の不吉さを熟知しているからだ。

「この声は、まさか……」

体の底から悪寒が沸き起つた。

野獣的な声質。悪戯心をこじらせた喋り方。

双方向でもないのにオーバーと付け加える人間を、彼は知っている。

「そここの少年！ そう、そのお前！ 体育館裏にみすぼらしく立っている一條拓海のことだ！ オーバー

ハウリング混じりに名指しされ、拓海の心臓が跳ねた。

「やっぱり……僕……？」

心が落ち着かずに、おろおろと周囲を確認する。案の定、放送を聞いた生徒たちがグラウンドから、校舎の窓から、あるいは屋上から拓海を見ていた。

われわれは今の君の告白に心を打たれた！ 「好きです東雲さん。僕と付き合つて下さい！」 想いが率直に伝わる良い表現だと思わないか諸君！ われわれは彼の熱意に感動を禁じ得ない！！ ……オーバー

拓海は血の気が引いた。

「終わつた……」

あつという間に、校内のどよめきが喧騒に変じる。

一條拓海があの東雲さつきに告白した！

いつもの放課後が、平和な時間が、音を立てて崩れ始める。人知れず告白をなかつたことにしてようとした彼の計画も、すべては水の泡になつた。

あまりの当惑に打ち震えていると、さらなる放送が響いた。

だがわれわれは長つたらしい愛の表現もなかなかに気に入つている。ここに君が昨晚寝ずに考えた告白の文面があるが、実に個性的で素晴らしい文章だ。これを披露しないのはもつたいない。人類における英知の損失だ。なので今からこの素晴らしい愛の言葉をすべて読み上げることにしよう。バリエーション豊かで、なんと五十三種類もある。みな心して聞くように。オーバー

「告白の……文面？」

拓海には心当たりがあつた。ありすぎた。

目の下に隈を作りながら、夜中に書いた原稿の数々。あまりにも

恥ずかしかったので今朝方ボツにしたはずのレポート用紙は  
「ちやぶ台の上に置いたまま……」

悄然とつぶやく。けたたましい後悔が警鐘を鳴らす。

拓海の額を冷や汗がなぞった。

では一枚目

「やめろお ッ……」

両手で耳を塞ぎ、顔を真っ赤に燃やしながら、拓海はグラウンドを一直線に駆け抜けた。

運動部の生徒たちが田を点にしている。だがそんなことは関係ない。土煙を上げ、拓海は全力で疾走した。すぐに息は切れたが、かまわずに走る。心臓が破裂しても、足がちぎれたとしても、あれだけは。

最悪の事態が脳裏に浮かび、頭を振つて打ち消す。

「せせてたまるかっ！」

まっすぐに前を向く。塞いだ手のひらの向こうで、思い出したくもない文面が嬉々として読み上げられている。

明日から楽しい夏休み。

されど最悪の始まりだった。

浅神社の噂？（前書き）

放送を聞き、とある建物に駆け込んだ拓海は……

## 浅神荘の噂？

あさがみそつ  
**浅神荘**には噂がある。

浅神荘とは学校付近にある一階建てのボロアパートだが、見たところ何の変哲もないその木造モルタルには、数えきれない風聞があった。

- 1、浅神荘には人語を解す猫がいる。
- 2、アフリカ帰りの傭兵がいる。
- 3、売れっ子の漫画家がいる。
- 4、宇宙人もいる。
- 5、浅神荘は裏社会とつながっている。
- 6、地下通路で街中とつながっている。
- 7、異次元ともつながっている。

そのどれもが信憑性のない馬鹿げた噂だが、近隣住民にそれを疑うものはいない。

これらの事象は自明の理、無謬の事実として、彼らに受け入れられているのだ。

その証拠に浅神荘の半径十メートル以内に近づく人間はない。学校の生徒たちも、かのアパートの周囲は避けて通学する。生徒はおろか、教職者は近隣の大人たちもそうなのだから、ますます噂は存在感を増す。元の風聞が小学生の作り話にも等しいのに、彼らはそれを信じていた。

浅神荘には近づかない。  
それが暗黙のルールだ。

一人の少年が息を切らしながら、とあるボロアパートの前にさしかかった。背の低いブロック塀に囲まれた敷地内は、雑草が原生林

の「ごとく生い茂っている。全体的にくすんだ家屋。ペンキの禿げた壁に、錆ついた鉄階段。築五十年は下らない、骨董品とも呼べそうな建築がそこにあった。

少年は入口の前で勢いよく切り返した。すでに膝は笑っている。体温も高い。それでも止まるわけにはいかなかつた。

「ふと見ると、塀の上で一匹の三毛猫が昼寝をしている。

「浅神さま！」 どうして止めてくれなかつたんだよつ！」

駆ける足をそのままに、彼は抗議の声を向けた。するとそれに気づいた三毛猫が億劫そうに目を細める。

「ワシの預かり知らぬところじや」

「くつ……」

しわがれた声を背中で無視し、拓海は玄関に差し掛かつた。

そのすぐ横に大きな表札がある。浅神荘 と書かれていた。

走つてきた勢いそのままに、彼は扉を開けた。その場で靴を脱ぎ散らかし、ドタドタと廊下の上を疾走する。

板張りの廊下は駆け抜けるたびに激しく軋み、その古さを如実に思わせた。あまりの音に床が抜けてしまうかと思つたが、今はそんなことを気にかける状況ではない。

目的の一号室はすぐ目の前にあつた。しかし立ちふさがる人影に気付き、彼はぎょっとして踏鞴を踏んだ。

「空太兄……何してゐの……？」

いきなり立ち止まつたせいか、汗がどつと噴き出した。体温が一気に上昇する。息も絶え絶えだ。

袖口で額を拭い、拓海はその人影、もとい宇宙服を睨んだ。

「シユコー……シユコー……」

シユノーケリングの音が聞こえる。そこにあるのはまぎれなく宇宙服。重厚で寸胴なスーツが微動だにしない光景は圧巻だ。全身の三分の一を占めようかという巨大なヘルメットが陽光を反射してギロリと光つている。不透過のため中の様子は伺えず、ただ規則正しい呼吸音が響くのみ。しかし断つておくが決してここは宇宙などで

はなく、ただのボロアパートだ。

「いいからそこどいてよつ！ いますぐ軍曹ぐんそうを止めないと！」

窓の外ではまだあの放送が続いている。焦燥に急かされ、拓海は宇宙服を押しのけようとした。

「うわつ！」

宇宙服の主はぴくりとも動かない。拓海は突っ込んだ反動で床に弾き飛ばされてしまった。

「空太兄っ！ 何するんだよ！」

尻餅をついて抗議する。すると宇宙服もとい空太は、おもむろに腕の部分をぱかっと開き、中から液晶のついた端末を取り出した。空太は宇宙服の太い指で何やらカタカタと打ち込み、それをこちら側に見せる。

ここに「拓海を足止めしろ」と言われてるから。

タイピングされた文字が、紫の液晶に浮かび上がっていた。

「軍曹の差し金だな……くそつ、部屋はもう目の前なのに……」

悔しさに歯噛みする。時間がない。こうなつたら多少強引な手を使ってでも、彼を退けなくてはならない。

「空太兄、いますぐそこをどかないで、その宇宙服から引っ張り出さよ」

多少の凄みを込めてつぶやくと、いままでは山のよつてびくともしなかつた空太がひるんだ。明らかに動搖し、オロオロとその場を行ったり来たりしている。

「ほら、たまには外の空気も吸わないと！」

拓海が襲いかかるフリをすると、空太は一目散に階段の方へと駆けて行つた。よほど宇宙服を脱ぐのが怖いのだろう。あれほど重そうなスーツを着ていてるのに、逃げ足だけは早い。とにかく、これで障害は一つ突破した。

「つて、ほつとしてる場合じゃない！」

ドアの向こうから高らかに笑いが漏れていた。まだ最大の障害が残っている。拓海はすっと起き上がり、勢いよく扉を開けた。

「最高だね。途中からテンションが上がりつて名前を呼び捨てにしてる辺りが特に」

同時に、一人の男と里か合つた。

置敷きの六畳間に、ちゃぶ台がある。そこに赤髪の男がいた。二十代半ば。目つきは鷹のように鋭く、黒のタンクトップとミリタリーパンツの上から、隆々とした筋肉が浮かんでいる。軍人のような出で立ちだ。

ちやふ台の上には見たこともない通信機器が置かれていた。何台もの筐体とアンテナが積み上げられ、重みでテーブルの足が軋んでいる。床には無数のコードが張り巡らされ、その上に何枚もの「見えある」レポート用紙が落ちていた。

マイクに向かってしゃべり始めた。

「…流れるかああああああああああつ…！」  
顔を真っ赤に沸騰させ、拓海は滑り込むようにして通信機のスイッチを切った。一瞬のラグの後、外に響いていたハタ迷惑な放送が止む。機器の温度は下がっていくが、反対に拓海の体温は上昇の一途をたどる。

絶望が彼の頭を塗りつぶした。あれが……読まれた。全校生徒どころか近隣住民にも聞こえる大きさで、しかも、三十一枚も……。「なんだよ拓海先生……せつかくオレ様が先生の傑作を読み上げてるつてのに」

不服そうに、何の悪びれもなく、男が手に持ったレポート用紙を床に投げた。ぱさりと床に広がったそれは、拓海は昨夜に寝ずに考えた告白の文面だ。

あの文章が、校内放送でほとんど  
「この世の終わりだあ…………」

拓海は床に両手をついたまま、顔を上げることが出来なかつた。うつすらと涙も滲んでいる。深夜のテンションで書かれたそれは、ほとんどが到底人様には聞かせられないものだつた。そんなものを聞かれてしまつては、もはや外を出歩くことすらできない。

「どうしてこんなむごいことを……」

軍曹と呼ばれた男をキッと睨みつける。

「面白そだつたからに決まつてるじゃねーか！」

男は豪気に笑つた。聞くまでもなかつた。

苦笑すら作れず、ただ深い溜息をつく。騒ぎの後に残されたのは絶望と、じちやじちやに散らかつた部屋だ。大掛かりな機材と無数の「コード。今朝までは小奇麗だつた六畳間が今は見る影もない。

「人の部屋をこんなにして……大体どこから持つてきたの。こんな通信機材……」

「ソマリア時代のツテでな。空輸で送つてもらつた」

「どんなツテさ！……それにどうやって告白のことを知つたんだよ」

昨夜から目を付けられていたのはわかるが、それを考慮しても放送のタイミングは寸分の狂いもなかつた。

「胸ポケットを見てみる」

男が拓海のYシャツを指さした。慌てて手を当てるが、明らかに異物感がある。

「何か入つて……」

取り出しみると、それは空薬莢だつた。

「どうしてこんなものが……」

「盗聴器だ。いかしたデザインだろ？」

男が満面の笑みで告げる。拓海はがっくりと崩折れた。そこまでされていたなんて。

「もういい……僕はこのまま野垂れ死ぬ……」

拓海はすべてを諦めた。冗談みたいなことを本気でやる。そんな彼の存在を考慮しなかつた自分が悪かつたのだ。

「たかが女の一人や一人に振られただけじゃねーか。どうしてそんなに落ち込む必要がある」

「出来たての傷をその場でえぐり広げたのはどこの誰さあっ！」

それでもあまりに理不尽だ。振られただけでも傷心なのに、全校生徒にその事実を知られ、もはや立ち直る未来も見えない。夏休み明け、一体どのような顔をして登校すればいいのだろうか。

「それに浅神荘の名前まで出して、僕がこここの関係者だつてバレちゃうじゃないか！！」

拓海は自分がこここの住人であることを人に知られたくなかった。

知られたくない理由があった。

「いいじゃねーか別に。事実お前は一年前から、ここの一号室に住んでるんだから」

赤髪の男が億劫そうに欠伸をした。その態度に拓海はむつとした表情を向ける。

「それは事実だけど、軍曹はここが何て呼ばれてるか知ってるの！？ 魔窟だよ魔窟！ 普通ただの貸しアパートにそんな名前つかないよー！」

浅神荘は近隣から徹底して避けられている。ひつきりなしに騒ぎを起こす、謎に満ちた木造モルタル。そんな場所の住人だと知られた日には、一体何を言われるかわかつたものではない。

「僕がどれだけ苦労してここのこと隠してるのか

突然、廊下に大きな音がした。扉を蹴り開けたような打撃音だ。間髪を入れず、ドタドタと乱暴な足音が近づいてくる。否応なしに、彼女の苛立ちがわかつた。

「まずい…………」

拓海が悄然とつぶやいた時にはもう遅かった。彼女は勢いよく扉を開け、部屋の中に飛び込んできた。

「あんたら締め切り前は静かにしろっていつも言つてたるでしょーがツー！」

歳は二十四、五。背の高い女性だった。

角縁眼鏡の下に目よりも大きな隈を作った彼女は、日本人離れしたバタ臭い顔を殺人鬼とそう変わらぬ剣幕に変えて、こちらを強く睨んでいた。ボサボサに傷んだセミロングの茶髪に、化粧つ氣のまるでない容貌。着古したTシャツと七分丈のハーフパンツはどちらもヨレヨレで、洒落つ氣などどこにもない。服の上からでもわかる豊満な胸元が、走ってきた勢いをそのままに揺れている。

「笙子姉ストップ！ これには深いわけがっ！」

必死に弁明を試みるも、有無をいわざずに距離を詰められた。その手には漫画用のGペンが逆手で握られていた。鋭利なペン先が冷たく光り、拓海は息を飲んだ。絵を描くための道具が、今は生糸の凶器にしか見えない。

「理由なんて関係ない……アタシの静寂を返せ……」

彼女は理性を完全に失っている。とても説得が通じるような状況ではない。

相手を刺激せぬようゆっくりと後ろずさつた拓海だったが、背中がふすまにぶつかった。もう後がない。

緊迫した空気が走る。目の前には柔和そうな胸部と鋭端なペン先があった。

「ぐ、軍曹……っ」

藁にもすがる思いで助けを呼ぶ。この事態を作り出した張本人は、窓の外をどこか遠い目で見ていた。

「あー、コソボのアルバートは元気かなあ……でもきっともう死んでるだろうなあ」

「なんで今アフリカの戦場に思いを馳せてるのー！」

「何を『ごちゃごちゃ』と……覚悟はできんでしようね」

額に冷たい感触があつた。

ぞつとするような声に田線を戻すと、眉間にペンの先端が当てられていた。鳥肌が立つ。あまりの驚怖に身動きがとれない。

「死んだ……」

十五年の短い生涯を諦め、拓海は放心した。思えば何もない人生。

振り返ったところで後悔はない。何度も繰り返したところで、自分はまた同じような人生を送る。自分が無力であることを、彼は嫌とうほど知っていた。

ところがその時、彼女の手からするりと何が抜け落ちた。Gペンだ。「口口口と畳の上を転がり、ピタリと静止する。

同時に、彼女の体が崩れ落ちてきた。

「うわっ

体重に押し潰され、バランスを失った拓海はそのまま床に倒れ込んでしまう。顔にのしかかる柔らかな感触に緊張しながらも、拓海はやつとのことで彼女の体を引き剥がした。

「ああ限界……もう寝る……一時間経つたら起こして……」

うつ伏せの状態で、彼女がゴロンと畳に転がる。

数秒と待たずに、彼女の寝息が始まっていた。先程の殺氣はどこへやら、いまや生氣すらも感じられない。

「た、助かった……」

危急の回避に、拓海は胸をなで下ろした。なで下ろしたはいいが、ふとそれがまざい状況だと気づく。

「え、ちょっと笙子姉！ 今寝たら締め切りに間に合わないんじや

」

彼女には漫画の締め切りがある。

熟睡する彼女は、その頭髪と衣服の乱れ様から推察するに、おそらく丸三日は寝ていなかつた。一度こうなつた彼女を日覚めさせるのは至難の業だったが、万が一起こせなかつた場合、酷い目に遭わされるのは他でもなく拓海だ。

「起きてよ笙子姉！ 起きてつてばっ！」

両肩を掴んで必死に振り起こしたが、彼女は実に幸せそうな寝顔で涎を垂らすばかりで、まったく起きる気配がない。

拓海は青ざめた。しかし同時に、静かな怒りが去来した。

「何なんだよ、この状況……」

あらためて部屋を見回す。

邪魔でしかない通信機材と、畳に散らかったレポート用紙。素知らぬ顔の軍曹に、熟睡中の笙子。そして、心に残る出来たての傷跡。

。

拓海は、東雲さつきに振られてしまった。

夢ではない事実が、時間差でまた胸を締めつける。「大嫌い」という一言がこれほどまでに人を傷つけることを、拓海はその身で体感した。

それは自業自得だ。端から釣り合わなかつたのだ。期待がなかつたといえば嘘になるが、十分に予想できた答えだつた。

しかしここの住人たちときたらどうだらう。

意中の相手に振られたばかりだというのに、自分は慰められるどころかその傷を新鮮なうちに抉られ、あまつさえ大粒の岩塩を塗りたくられていいる。

少年の内に怒りと慟哭が生まれていた。なぜ自分はこんな目に遭つているのか。なぜ彼らはこんなにも薄情な扱いしてくるのか。なぜ自分は、こんなアパートにいるのか。

湧き上がる感情を抑えきれず、拓海はぼつりと呟いていた。

「もう嫌だ……こんなアパート」

言つてしまつてから、少し後悔する気持ちもあつた。たとえようのない罪悪感。本心と衝動の狭間に、不思議な動搖が吹き込む。

「だったら出でくか？ どうせ他に居場所もないくせに」

驚いて振り返ると、ドアの付近にサングラスをかけた若い男が立つていた。

浅神莊の噂？（前書き）

最後に現れた住人は……

抜けのよつた金髪で、漆黒のサングラスが鋭く光つてゐる。スースのポケットに両手を突つ込み、あざ笑うかのように言い放つたその男は、同性から見ても相当の美形だ。

「ま、お前にはそんな度胸もないだろうけどな」

彼は拓海を鼻で笑つた。その人を小馬鹿にしたよつた態度が気に食わず、拓海はむつとした表情を示す。

「……竜一兄」

「竜一！ お前がこんな時間に帰つてくるとは珍しいな」

軍曹さきしやくが嬉々として彼の名を呼ぶ。

早乙女竜一さおとめりゅういち。彼は浅神荘の大家であり、管理人だ。管理人であるからして、当然彼もこのアパートに住んでいる。

「お、都合よく全員揃つてるじゃねーか」

他の住人と同じく遠慮なしに部屋に足を踏み入れた竜一は、その場にいる面子を把握して満足そうに両眉を上げた。見ると彼の背後には、いつの間にか三毛猫と宇宙服、つまり浅神と空太が並んでいる。拓海、軍曹、笙子、空太、浅神、竜一 この浅神荘の住人は、確かにこれで全員だつた。

「あ？ 一人寝てんのか……」

畳の上で熟睡する笙子を見つけた彼は、ひどく不機嫌そうに顔を覰めた。

「おい、起きろ乳眼鏡」

「ちよつと竜一兄、そんなことしたら！」

あらうことか彼は、眠つてゐる笙子の頭を右足で踏みつけていた。拓海は青ざめて止めに入るが、彼が足をどける気配はない。それどころかぐりぐりと彼女の後頭部を踏み込み始める。

「だつてこいつ、ただじや起きねーじやん」

竜一がそつけなく答える。確かに、自分の頭に他人の足が乗つた

状況下でも、笙子に起きる気配はなかった。それどころかさつきよりもますます寝入っている。よほど睡眠を取つていなかつたのだろう。幸せそうに涎まで垂らしている。

だがそんな彼女に痺れを切らした竜一は、うつ伏せに眠る彼女の体を強引にひつくり返し、軽く舌打ちした。

その直後、時が止まった。

拓海は信じられない光景を目にしていた。そこにいた全ての人間（及び三毛猫）の表情も瞬時に凍りつく。それまでは飘々と振舞つていた軍曹でさえ、呆気に取られてあんぐりと口を開いている。

竜一が、寝ている笙子姉の豊満な胸を驚掴みにしたのだ。むにゅんという擬音と共に、彼女のたわわな胸部が歪んでいた。拓海は絶句した。なんてことをしてくれたのだろう。もはや事態は彼女の締切りがどういづの問題ではない。

「 ッ！」

これにはさすがの笙子も飛び上がり、仰天した様子でその両目を見開いた。覚醒して数秒は事態が飲み込めないようだつたが、やがて状況を理解した彼女の頬がみるみるうちに紅潮していく。

「あ、あ、あ、あんた何やつてんのよつ！」

「お、やつと起きたか」

満悦そうに竜一が笑つた。と同時に、振り上げられた笙子の平手がその不躾な男の頬を激しく引っ叩いた。狭苦しい六畳間に小気味よいまでの音が響く。

「痛つ 何すんだこのアマツ……」

「あ、あんたこそ、久々に帰つてきたと思つたらなんてことしてくれんのよつ！ ……ああ、もう。眠気が吹つ飛んだわ……」

怒りを通り越して笙子は呆れていた。自分の胸を隠すように押さえ、竜一とは十分に距離を取つてている。未だに動搖しているようだつた。

「締切りに間に合つてよかつたじやねーか

赤く腫れた片頬を押さえながらも、竜一は悪戯に笑う。

「……アホ」

笙子は視線を畠に逸らし、気弱な声で呟いた。

その光景を傍から見ていた拓海は、事態が平和裏に済んでほつとしていた。自分の部屋で血を見るのだけは勘弁だ。笙子の締め切りも間に合つ。

それにしても、どうして竜一は帰ってきたのだろうか。

仕事でアパートを空けることの多い彼は、めったにアパートには帰らない。月に三日いれば良いくらいだ。果たしてそれは管理人としてどうなのかと問いたくなるが、浅神荘は彼の収入によつて成り立つてるので文句は言えない。しかし竜一は一体どんな職業に就いているのか、拓海は一切知らなかつた。他の住人と同様、彼もまた謎に包まれている。

怪訝に彼の様子を伺つていると、竜一はどつしつと床に腰を下ろした。それから胸元から何やら書類の束を取り出し、賭場の胴元よろしくちゃぶ台の上に叩きつけた。通信機材など氣にも止めない。

「何だ、それ。なんか面白いもんでも持つてきたのか？」

軍曹が物珍しそうに書類の束を覗き込んだ。すると竜一はうんざりした声で

「そんなんわけあるか。近隣住民からのありがたい苦情だ」とこめかみを引き攣らせた。

興味津々に、他の住人も車座になつてちやぶ台を囲む。びつしりと記載のなされたそれは、どうやら役所に寄せられた正式な書類らしかつた。

「これ……全部？」

あまりの量に拓海は息を呑んだ。紙束はずつしりと厚く、優に百枚は超えていた。

「苦情つて、オレら近隣様に何か迷惑したか？」

「軍曹がそれを言わないでよ……」

あつけらかんと言つた軍曹を恨めしそうに拓海が睨む。畠に散ら

かつたレポート用紙と恥辱に満ちた校内放送を忘れたとは言わせない。

「いいから。今から俺が何枚か読み上げてやる。耳の穴かっぽじつて聞けよ」

竜一は二人のやりとりを煙に巻く。彼は書類のうちの何枚かを手に取り、切れ目ない口調で音読した。

「一、毎日毎日銃声のよつた音が聞こえてうるやい」

「ようなつてなんだよ。オレの愛機たちは全部本物だぞ！」

軍曹が反発する。

「二、敷地内で飼い慣らしている野良猫たちをどうにかしろ」

「あれはワシの熱心な信仰者たちじゃ、野良猫呼ばわりするでない浅神が反発する。

「三、夜中に飛来してくるUFOのらしき飛行物体の光が眩しくて眠れない」

「……シユ、シユ」

空太が反発する。

「四、天野笙子先生の休載が多すぎる」

「アタシの原稿と、ひとと一体何の関係があるのよー！」

笙子が反発する。

住人たちは矢継ぎ早に反論した。

それらはアパートに寄せられる苦情としては奇特すぎる内容だったが、彼らはそれ自体は否定しない。ただ各々が何かしらの不満があるようだ。だが誰よりも不服なのは拓海だ。

「僕には何の関係もないのに……」

そう。彼に関する苦情は存在しない。

誰にも聞こえないような声で呟く。どうせ聞き入れて貰えないのだから、言つたところで意味はない。虚しさが彼の胸を穿つ。

「あー、お前らひつるさいー」とにかくどうにかしないと立退き命令が下るぞ、これ

竜一はさも鬱陶しげに書類をバタバタと仰ぎ、住人たちの声を制

した。

立退き。

その言葉に全員が押し黙る。拓海にとつてもそれは他人事ではなかつた。

自然と静かになつた部屋に、窓からの蝉しぐれが飛び込んでいる。本格的な夏が訪れ、クーラーもないこの部屋はただでさえ暑苦しい。これだけの人数が黙りこくつていると、余計暑さが強調された。

その重苦しい空氣を気にもせず、竜一が不敵にほくそ笑む。

「そこでだ。俺に名案がある」

「名案？」

笙子は首をひねる。他の誰もが同じ思いだつた。

「おい、もう入つてきていいぞ」

彼は玄関口に声をかけ、そこに待機していた何者かを呼び出した。程なくして、一人の少女が部屋の中に入つてくる。ただでさえ飽和状態の部屋に、新しい訪問者が増えた。

長い黒髪を揺らした彼女は、拓海と同じ高校の制服を身に纏つていた。凜とした少女だつた。

「何この子、どうしたの？」

いきなり現れた少女に笙子が顔を顰めた。他の住人たちも同じだ。

「そこで拾つた」

「拾つたつて……あんた」

淡々とした物言いに笙子は呆れ顔を向けた。竜一は意に介さず、さらにつづけなく続ける。

「こいつ、うちの新しい管理人にするから」

数秒の間があつた。それから一斉に素つ頓狂な声が上がる。

「「「はあ！？」」

拓海、軍曹、笙子の三人は啞然とした。

それまで尻尾を揺らしていた浅神も動き止め、空太もまた、宇宙服の上からでもわかるほど大きく仰け反つている。

「ちょっと、いきなり何言い出すのよっ！」

笙子が彼を叱責するのも無理はない。

見ず知らずの少女を、いきなり管理人に任命する。大家でもある

彼の決定は絶対だが、非常識にも程がある。

それに加え、拓海には別種の狼狽があつた。

「東雲……さん？」

冷や汗と共に、その名をつぶやく。

彼女は、東雲さつきだった。

そのつぶやきに彼女は一瞬の戸惑いを見せたが、またまっすぐに前を向いた。さつき別れたと同じ制服姿で、その手には黒皮の竹刀ケースが握られている。もう片方の手には学生鞄。部活帰りを如実に思わせる格好だった。

拓海はまるで現状を理解できなかつた。

どうして彼女が自分の部屋にいるのか。

竜一は今、彼女をどうすると言つたのか。

呆然とする拓海を尻目に、彼女は礼儀正しく、深々と頭を下げた。流麗な黒髪がさらりと揺れる。

「東雲さつきです。管理人として至らぬ所だらけですが……どうかよろしくお願ひします」

再び顔を上げた彼女に迷いはなつた。

蝉が鳴く。対照的に部屋は静まり返る。

「えええええええつ！！」

それから数秒後、拓海が今日一番の絶叫をした。

「うるせーぞ拓海。何か文句あんのか？」

凄みの利いた声で竜一が睨む。だが拓海の耳には入らない。

「そそそ、そんな馬鹿な……」

少女は何も言わなかつた。ただ無表情で立ち尽くしている。今日の前にいるのは、間違いなく東雲さつきだ。

思考がぐちゃぐちゃに混乱した。口の中が激しく渴く。

東雲さつきが浅神荘の管理人になる。

それはつまり、彼女とひとつ屋根の下で暮らすことを意味している。

た。

## 住人紹介（前書き）

浅神荘の住人リストです。木造モルタル一階建て。アパートというより共同生活空間に近いかも。

## 住人紹介

### 一階

一号室 早乙女竜二

25歳。

浅神荘の元管理人にして大家。  
謎の起業家でもある。

傲岸不遜なガキ大将氣質。  
浅神荘のリーダー。

二号室 一条拓海

15歳。

浅神荘の雑用係。  
どこにでもいる普通の男子高校生。  
東雲さつきに想いを寄せているが……。

三号室 山梨笙子

24歳。

天野笙子として活動する人気漫画家。  
日本人離れした器量よしだが身嗜みも性格もすばら。  
アシスタンントはつけない主義。

四号室 東雲さつき (こののめさつき)

15歳。

浅神荘の新管理人。

拓海のクラスメイト。

剣道の腕は全国クラス。

一階

五号室 空太そらた

年齢不詳。

無骨な宇宙服を身にまとっている。

対人恐怖症。

会話は腕に組み込まれた専用の端末で行う。

六号室 軍曹ぐんそう

25歳。

元傭兵で兵器や通信機器のスペシャリスト。  
いつも騒ぎばかり起こしているトラブルメーカー。

七号室 開かずの間

異世界に通じているとも言われる。

八号室 空き部屋

夜な夜な幽霊の泣き声が聞こえるらしい……。

屋根裏

浅  
神  
あさ  
がみ

人語を解す三毛猫。

住人のいる場所にどこからともなく顔を出す。

## 新管理人は女子高生？（前書き）

竜一は東雲さつきを新しい管理人にすると言い出した。拓海は反対を試みるが……

## 新管理人は女子高生？

「じゃあ手短に紹介すっから、ここに彼らのことよろしく  
まだ住人たちは呆気に取られていた。拓海に至っては開いた口が  
ふさがらずにはいる。そんな彼らの反応を氣にも止めず、竜二は頭を  
搔きながら自分が連れてきた少女に紹介を始めた。

「この軍服着た馬鹿が軍曹、二十五歳」

「……お、おう」

戸惑いながらも軍曹が片手を上げた。馬鹿と呼ばれたことには突  
つかからない。

軍人姿の男をいきなり「軍曹」と紹介されても普通は困るだろう  
が、東雲さつきは抵抗なく黙礼した。日頃から武道で心を鍛えてい  
るからか、肝が座っているのかもしれない。

「で、そこの眼鏡女が山梨笙子、二十四歳。バスト八十九」

「よろしく……ってなんであんたがそんなこと知つてんのよ！」

笙子は憤慨の目を竜二に向けた。相変わらず目の下に大きな隈を  
作つた彼女だが、他に比べて見た目は普通だ。若い女性とは思えな  
いほど服装や髪がボロボロであるが、軍服や宇宙服よりはましだろ  
う。同性がいることにさつきも警戒心を薄めたようで、やや安堵の  
表情を見せる。

「この宇宙服が空太、これも年齢不詳」

「シユ、シユ！」

空太がミリ単位の動きでかすかに一礼した。さすがに彼の存在には東雲さつきも目を丸くしていたが、それでも「どうも」と会釈する。

「んでそこのおいぼれ猫が浅神、何歳かは知らん」

竜二が目顔を向けた先、部屋の隅っこで浅神が丸くなつていた。  
その三毛猫は軽く少女を一瞥したが、またすぐそっぽを向いてしま  
う。さつきはおそらく、ただのペットだと思っているだろう。

「で、この冴えないのが一条拓海。高一だからお前と同じ年だな、確か。雑用係だからこき使つていいぞ」

自分の名を呼ばれ、拓海は心臓が収斂した。自然と体が硬化する。躊躇うように顔を上げると、彼女と目が合つた。お互いに言葉はない。彼女はただ黙然と構えている。拓海もまた、どう声をかければいいのかわからなかつたのだ。

「そして俺が偉大なる大家にして元管理人、早乙女竜一だ」最後に竜一が自らを紹介した。他者紹介に比べて温度差があるのはデフォルトだ。

「総勢五人と一匹。これが浅神荘の住人だつた。コモンセンスや統一感の欠片もない、自由奔放な面々である。

「さつき言った通り、自分の仕事をこなせば家賃は必要ない。食費も俺が出してやる。部屋は空いてる四号室を使つていい。そこの反対側の角だ」

竜一は廊下の外を指さした。四号室はここから一つ隣の部屋だ。その間に笙子の部屋がある。

「……はい」

さつきは丁寧にお辞儀をした。異存はないようだ。

「ちょっと待つてよ竜一兄！ 管理人とか仕事つて一体

まだ納得のいかない拓海は疑義を挟んだ。さつきを新しい管理人にするという説明だけでは何が何だかさっぱりわからない。

すると竜一は舌打ちし、面倒くさそうに追加説明を始めた。

「言つただろーが、新しい管理人だよ。仕事はお前ら住人の管理。自分の役割をこなせば家賃は取らない。お前と何も変わらないだろ。それがうちのルールだ」

拓海は浅神荘の雑用係だつた。そのため掃除、洗濯、買い出し、炊事。日々億劫な仕事を押し付けられるが、代わりに家賃を含め生活費を払わずに済む。一人暮らしの高校生としては願つたり叶つたりの環境だ。もちろん先程の騒動から見てもわかるように、その代償は大きいが……。

「確かにそうだけど、こきなり同じ年に女の子と暮らさせて言われてもできないよっ！」

拓海は必死に抗議する。告白のことは言わなかつた。そんなことを知られれば竜一は腹がよじれるほど笑うだろう。彼はそういう人間だ。

「笙子とは一緒に暮らしてゐるじゃねーか

しかし竜一はすぐなく反論する。痛いところを衝かれ、拓海は答えに窮した。

「それは……そうだけど、笙子姉はずばらだから女人つて感じしないし……」

「アンタ殺されたいの」

隣で笙子がこめかみを引き攣らせていた。

「いえ、何でもない……です。それでも、今まででは竜一兄が管理人をやつてきたんだから、別にこれまで通りでいいじゃないか……」

拓海は消え入るような声で不満を述べた。言い合いの結論は既に見えていた。

「それが限界だから、こうして新しい人材を探してきたんじゃねーか。それに今後の俺は何かと忙しい。しばらくは帰れないかも知れん。それとも何か？ お前がこの騒々しい馬鹿どもを一人で制御できんのか？ 自分一人のことも口クにできねーのによ

竜一の挑発的な態度に、拓海は思わず拳を握つた。頭に血が上る。腸が煮えくり返る思いだつた。ここまでして黙つてゐるつもりはさすがの拓海にもない。

「そいやつて竜一兄はいつもいつも

「ん、何だこれ」

僕を見下している 拓海がそう叫ぼうとしたとき、カサリと小さな音がした。

竜一のつま先に紙切れが触れたのだ。見るとクシャクシャになつたレポート用紙が床に落ちている。竜一は訝しみながら、その紙片に手を伸ばした。

まずい。

「ちょっと待つたあああ！」

それは顔から火が出るようなあの告白の文面だった。

瞬時の判断で拓海はそれを奪い取った。同時に床に散らばったレポート用紙もすべて回収する。こんなものを見られた日には、羞恥心で死んでしまう。しかも東雲さつき本人を目の前にして、これを読まれるわけには絶対にいかない。

心臓を早鐘にしながらも、拓海は搔き集めたそれらをグシャグシヤに丸めた。そして丸めた紙くずを至極大事そうに抱えた。燃やそう。また誰かに読まれる前に今夜焚き火で始末するのだ。

「……助かった」

最悪の事態を阻止した拓海は、ほっと息をつく。だが

「なるほどな。どうりで拒むわけだ」

その嘲るような口調に、嫌な予感がした。

竜一は拓海とさつきを交互に見やり、やがて鼻につく言い方で笑つた。

「お前には天地がひっくり返つたって無理だ、こんな上玉」  
拓海は絶句した。必死の抵抗もむなしく、すべてがお見通しだつた。

一番知られたくない相手に告白の事実を知られてしまった。予想通り、彼は人の不幸を心底愉悦し、くつくつと腹の底から笑つている。

顔が燃えるようだ。あまりの嚇怒に拓海は憤死してしまつかと思つたほどだ。

「んじゃ、そういうことだからよろしく」

ひとしきり嫌味な笑いを響かせた後、彼は万事解決と言わんばかりに、住人たちに解散を言い渡した。

気まずさもあつてか、部屋中がしんとする。

「は！ こんなことしてらんない。さつさと原稿やらないと」

不意に笙子が立ち上がった。そのまま彼女は自分の部屋に向かう。

「笙子姉、待つてよつ！ 竜一兄を止めなくていいの！？」

自分一人ではもはやどうにもならない。拓海は切実に助けを乞つ

が、彼女は聞く耳を持たない。

「ああもう、時間ないのに！ いいじゃない！ うちの住人は突然  
増えるもんなのよ」

焦る口調で言い放つた彼女は、冷徹にも部屋を出て行つてしまつた。

軍曹も軍曹で、今度はコミュニティFMでもジャックしてみるが、  
などと不穏なことをつぶやいている。さつきのことに対する反対意見はな  
いようだ。そのまま彼も部屋を出ていってしまった。

まったく腑に落ちない拓海と対照的に、彼らはそれぞれの部屋に  
戻つていく。

空太の姿もいつの間にか消えていたし、浅神が窓から外に出てい  
くのが見えた。

結果的に、部屋には竜一とさつきと拓海だけが残された。気まず  
さもあつてか、部屋が途端に寂莫とする。

そんな重苦しい空気を意に介さず、竜一はさつきに話題を振つた。  
「そういえばお前、剣道やるんだつたな。強いのか」

「はい……それなりに」

彼女は遠慮がちに答えた。それなりどころではない。彼女は一年  
生にもかかわらず、夏前の新人戦で全国のベスト16に入った腕前  
だ。おそらく竹刀を持たせたら男でも歯が立たないだろう。彼女は  
学生鞄の他に、彼女は愛用の竹刀を持ち歩いていた。今も彼女の傍  
らには、黒皮の竹刀袋が立て掛けである。

「それは心強いこつた。しかしうち管理人に竹刀は必要ない。これ  
からのお前に必要なのは……」

そう言いながら、竜一は押し入れを開けてガサゴソと何かを探し  
始めた。あくまで拓海の部屋の押入れであるが、もうずいぶんと前  
から共用の収納スペースとして使われてしまつていた。プライバシ  
ー空間であるはずなのに、彼の部屋には人の出入りが多い。

押入れの中があまりにも煩雜すぎて、竜一は目的のものを見つけられずにいた。その表情や悪態に苛立ちが見え始める。

そんな竜一の様子を、さつきは不思議そうに見つめていた。

そしてそんなさつきの様子を、拓海は無言で見つめている。

今自分の部屋にいるのは、紛れもなく自分のクラスメイトであり、想い人だった。

その事実に、自然と胸が高鳴る。振られた振られてないは関係なく、しようがない心の反応だった。

しかし彼女がどうしてここにいるのか、拓海にはまださっぱりわからなかつた。

管理人としてここに住むということを、彼女の家族は知っているのだろうか。

そもそも竜一と彼女はいつどこで出会つたのだろうか。疑問は尽きない。だがそれを聞くにも、自分から声をかける勇気はなかつた。

「お、あつたあつた」

竜一は奥の方で何かを見つけたようだつた。それをガラクタの中から長物を抜き取ると、大量の埃と一緒に長物が顔を出す。それは使い古しの竹箒だつた。柄はまだしつかりとしていたが、穂の部分がすっかりと綻んでいる。

「今日からこれがお前の仕事だ」

竜一は片手で竹箒を掴み、さつきに向けて差し出した。

彼女はきょとんと立ち尽くしていたが、逡巡の後にそれを受け取つた。ずいぶんと大きな箒だ。彼女の動作でその重みが伝わつてくる。

そんなものを貰つても迷惑だつと拓海は思つたが、予想に反し、彼女はとても愛おしそうに箒を胸に抱いた。

「はい……よろしく、お願ひします」

よく見ると彼女の頬は軽く紅潮していた。

拓海が告白したときには一度も見せなかつた、女らしい優しい表

情。彼女は竜一の顔をおずおずと、恥ずかしそうに見やつている。まさか……。

拓海は頭が真っ白になった。

竜一は確かに相当の美形だ。性格に強引すぎるところもあるが、人によつては頼り甲斐があると感じるかもしれない。

彼女は強い人間だ。そんな彼女が他人に求めるものは、それ以上の強さだとしたら。

しかし拓海はそんな疑念を、頭を振つて打ち消した。

そんな踏んだり蹴つたりあつてたまるか。押し潰されそうな想いの中、拓海は黙つて下を向いた。

「ああ、言い忘れてたが、新管理人の補佐役は拓海、お前だからな」付け加えるように竜一が言つた。

「……は？」

わけがわからず拓海は啞然とする。

「当たり前だろ。右も左もわからない奴にうちの管理人なんて丸投げできるか。慣れるまで一人で管理人をしろ」

「一人でつて、そんなの聞いてな」

「今言つた」

迫力に満ちた面構えで、竜一に睥睨される。

その有無を言わせない態度に、拓海は思わず閉口してしまった。

「一人で協力して、近隣住民の苦情を絶対に解消しろ。タイムリミットは……そうだな、お前らの夏休みが終わるまでだ。それまでに原因が解消できなきや、お前は追い出すからそのつもりで」

それは脅迫めいた口振りだった。冗談で言つてはいる雰囲気ではない。

「追い出すつて……待つてよ……ここを追い出されたら他に行き場

所が」

「だつたらちゃんと管理人に協力しろ。いいな」

指をさし、竜一は彼を制した。強い命令口調に逆らうことができず、拓海は立ち止まつてしまつ。

浅神荘を追い出されたら、拓海に他の行き場所はない。

そうなれば必然的に実家に戻ることになるだろう。それだけは何としても避けなければならない。

どうしようもない現実の果てに、拓海の理性は諦念した。

「わかったよ、やればいいんだろ、やれば……」

半ばヤケクソな気持ちで、拓海はその命令を承諾した。

自分を振ったばかりの少女と一つ屋根の下で暮らす。

それだけでも気が滅入るのに、拓海は彼女と協力して、この浅神荘に関する様々な問題を解決しなければならないのだ。

考えるだけでも頭が痛い。彼女がいいかもしれないが、拓海からしてみれば死刑宣告に等しい。

そしてその仕事がどんなに大変なことか、彼女はまだ知らないだろ。う。

ここが、一体どんなアパートなのかさえも。

## 在りし日の出来事？

「えっと……その、この部屋を使えばいいんだと……思つ」

俯きながら、拓海はその扉を指さした。

竜二がアパートを去った後、さつきと二人取り残されてしまった拓海は、彼女を一階の四号室に案内していた。拓海の一号室からは二つ隣の部屋で、間取りは同じ六畳間だ。

さつきは無言で扉を見つめていた。もともと古い物件なので真新しさはないが、しばらく使用されていなかつたので生活の匂いがない開き戸だ。

拓海が浅神荘に来たのはちょうど半年前だった。少なくともそれからの間、四号室が使われたことはない。たまに掃除を命じられることがあつたので荒れ果ててているわけではないが、ここに他人が入ることにはある種の新鮮さがある。

さつきの凛とした横顔を見る。愛しい人の容貌。涼しげな黒髪と、泰然自若とした雰囲気。その纖細さに息を呑む。

聞きたいことは山ほどあつた。

なぜ管理人になつたのか。

家族はどうしたのか。

竜二のことを……どう思つていいのか。

それに告白を断られた手前、どうしようもない気まずさが彼を襲う。今も心拍は耳元にある。一人して廊下を歩く間、彼女の顔をまともに見ることすらできなかつた。

「そう。わかつた」

さつきは淡々と言つた。ただのクラスメイト。それ以上でもそれ以下でもない距離感だつた。

「じゃ、じゃあ、僕はこれで」

拓海の声がうわずつていた。逃げるよつて血室に床る。

「え、ちょっと…」

さつきに引き止められたような気がしたが、上手く耳に入らない。それに本当は浅神荘について説明すべきことがいくつもあるのだが、拓海は話す勇氣すら起きなかつた。

何を話せばいいのか。どんな顔をして相手を見ればいいのか。

今の拓海には想像もつかなかつたのだ。

短い廊下を早足で進み、拓海は部屋に逃げ込んだ。すぐにバタンとドア閉め、現実とのバリアを張る。

扉を背にして深呼吸をしてみるが、あまり効果はない。

「本当なの……か。東雲さんがうちに……」

言つていて声が震えた。

これで今日からさつきは同居人になる。だがそんな現実感はまるで湧かない。同じ教室にいるのとはわけが違う。笙子の部屋を隔て、今もすぐ傍に彼女がいるなんて。

考えると胸が軋んだ。

夢のような話なのに、現実は地獄に近い。どこの世界に自分を振つたばかりの少女と同居できる人間がいるだろつか。

「ダメだ……今日はもう寝よう」

拓海は思考を諦め、深い溜息を吐いた。すると脱力感が湧き出る。振り返ると今日一日、色々とありすぎたのだ。

布団を敷いて、口口りと寝転んだ。

染みだらけの天井が見えた。嗅ぎなれた古い匂いの中に、湿っぽさが混じっている。

「全部、夢だつたらいいのに……」

儚い願望を口にするが、その無意味さは重々理解していた。

眠気はすぐにやつてきた。つぶやいた言葉さえぼんやりと聞こえ、意識は虚ろになつていいく。

いつして、彼の一学期最後の日は終わつた。

半年前、拓海は今の高校に入学した。

地元とは遠く離れた学校を受験して、死に物狂いで勝ち取った合格だ。そうしなければいけない理由が彼にはあった。新生活への予感。これから始まる充実した日々。

新入生だった拓海には、しかし高校生活への高鳴りはなかつた。本来入居するはずだったアパートの一室を、浅神荘の住人（具体的には軍曹）によつて消し炭にされてしまつたからだ。

あの衝撃は忘れない。あれはそう。入学式の数日前に、彼が近所にあるごく新しい賃貸アパートに足を踏み入れたときのことだつた。遠く離れた実家から、拓海は見知らぬ街に引っ越してきた。緊張と期待が絹い交ぜになつた感情。その頃の彼にはまだそんな気持ちがあつたのだ。

温厚そうな大家さんに案内され、拓海は二階への外階段を上つた。すると突然、拡声器による警告が響いたのだ。

『あーあー、テストテスト。聞こえるかーその少年。われわれ浅神荘は今日、君にとつてあまりある朗報を持ってきた』

見ると、目と鼻の先にあつた別のアパートの屋根に一人の人影があつた。

一人は金髪の男だつた。拡声器を口元に当てた彼は黒いサングラスをかけ、口端を引き上げて哄笑している。

その隣にいるのは赤髪の、軍人だつた。なぜ軍人とわかるかといふと、ミリタリー調の服装もそうだが、彼が肩に抱えたそれにある。

RPG - 7。

別名、ロケットランチャー。

現代戦争映画でしかお目にかかれぬ代物が十数メートル先に存在している。そしてそれは、見事にこちらを向いていた。

「ひつ！」

引きつけを起こしたような声が聞こえた。それは大家さんの声だつた。初老で白髪混じりの彼は、からうじて残つた黒髪を白く染め上げそなぐらい恐れおののいている。それは拓海の反応とは明らかに違つた。大家さんは彼らを……知つていてる。

わけがわからず拓海が右往左往していると、再び拡声器の声が響く。

『われわれを君を浅神荘の給仕として迎え入れようと思つ。これは大変名誉あることだ。当然……拒否するわけないよな』

「給……仕？」

金髪の男がニヤリと笑つたのがわかつた。

いつの間にか、大家さんは脱兎のごとく逃げ出していた。年齢を思わせない俊敏さ、いや必死さだった。

拓海はそのときになつてもなお、それが何らかの余興の類いだと信じていた。物々しい戦争兵器も男のセリフも、あまりに現実感がなかつたのだ。

『この期に及んでまだ逃げないとは思つたより度胸があるんだな……それとも単なるバカか。まあいい、俺はどっちも嫌いじゃないからな！ せつかくだからお前のその誠意に答えてやる！』

生まれもつて人類の頂点にいたとでもいうのか、男は至極不遜な態度で言い放つた。それから彼は拡声器を切り、隣の赤髪に軽く耳打ちをした。

おうという肉声が聞こえ、赤髪の男が手際よく構える。がつしりと照準を定められ、拓海の世界が数秒止まった。

「…………へ？」

いとも簡単に引き金は引かれていた。

激しい発射音を引き連れ、鋭いロケット弾が白煙を射出して向かってくるまで、拓海は気づかなかつた。

高校の田の前という好条件にもかかわらず、このアパートの家賃が格安であったこと。

はじめて会つたとき、大家さんが妙にそわそわしていたこと。

ほとんど新築の物件にもかかわらず、ただの一人も入居者がいなかつたこと。

それらが全部、彼らのせいであることを知つたのは、拓海が入居するはずだった部屋が、爆炎と共にすっかり消し飛んだ後だつた。

## 夏休みの始まり

目が覚めると、朝だった。古びた六畳間の窓から光が差している。壁にかかった時計を見る。十時。朝というより半分は昼だ。

眠りすぎたからだろうか。体が倦怠感に蝕まれている。それでも頭を搔きながら、拓海は億劫そうに上体を起こした。

「なんで、あの日の夢なんか……」

拓海は浅神荘に入居した日のことを思い出していた。正確には、入居させられた日のことを。

住むはずだった部屋を粉々に爆碎された後、なお混乱する拓海は赤髪の男、つまりは軍曹によって素早く拉致された。

そのままこの部屋に連れ込まれ、拓海は一も二もなく契約を迫られたのだ。

竜二の要求は、浅神荘の給仕、改め雑用係としてここで働くこと。そしてその代償に、家賃や生活費は彼がすべて負担してくれるとのことだった。

父親が用意したアパートを壊された拓海には他の行き場所などなかつた。もともと無理を言つて一人暮らしを勝ち取つた手前、こんな騒動があつたことを知らせたら、すぐ実家に連れ戻されてしまうだろう。選択肢のなかつた彼は渋々、本当に渋々その要求を受け入れた。軍曹のサバイバルナイフを喉元に突きつけられていたという理由もあつたが、実際問題、拓海にはそうするしかなかつたのだ。それに生活費はすべてバイトで稼ぐという約束だったので、思わず僥倖の面もあつた。

あれからもう半年。それともたつた半年なのか。いずれにせよ、彼には苦労したイメージしかなかつた。

まだ眠い目を擦り、拓海はゆっくりと立ち上がる。

あぐびと同時に伸びをして、今日から夏休みであることを思い出しだした。

「学校は……ないのか」

伏し目がちにつぶやく。昨日の出来事をありありと想起していると、扉をコンコンとノックする音が聞こえた。

とたんに心臓が高鳴った。このアパートの住人に、わざわざノックをして部屋に入るような常識人は存在しないからだ。

「ちょ、ちょっと待つて！」

拓海は慌てて身だしなみを整えた。服装は昨日から制服のまま。傍らにあつた鏡で寝ぐせをおさめ、頬を叩いて思考を起こす。

扉の前で乱れた呼吸を落ち着かせる。緊張もあつたが、これ以上彼女を待たせるわけにもいかなかつた。

「待たせてごめん！」

拓海は決死の覚悟でドアを開けた。

南側の玄関から陽の光がよりいっそう強く差し込み、彼は少しだけ目を細めた。

そこに人影があつた。

凜とした顔立ちがこちらを見ている。胡桃のような瞳と目が合つた。

予想通り、廊下に立っていたのは東雲さつきだった。

「お、おはよっ……」

鯉のように口をパクパクしながら、拓海はよつやく声を出した。いつもと趣が違う。彼女はその長い黒髪を結い、ポニー テールにしていた。七分丈のハーフパンツに、ヨレヨレのTシャツ。靴下は履かず、色白の素足がさらけ出されている。質実剛健な彼女には似合わないくらいラフな格好だったが、よく見るとそれは見覚えのある服装だった。

「三号室の山梨さんに借りたのよ……いつまでも制服つてわけにはいかないから」

あまりにジロジロと見ていたせいか、彼女は屈づらそうに説明した。なるほど、確かにそれは笙子の服だった。細かい場所に使い古した跡が見られ、所々に漫画用のインクがこびりついている。サイ

ズも彼女は大きいようで、特に胸元の布がだいぶ余っていた。それでも女子高生の私服としてさほど違和感がないのは、彼女の可憐な容姿が所以だろうか。

それに加え、彼女は昨夜竜一にもらった竹箒を後生大事に抱えていた。

仕事道具として必要だと思ったのだろうか。眞実はどうであれ、彼にとつてそれは快い光景ではなかつた。

「つていうかもう十時すぎよ。一條くんはいつもこんな時間に起きてるの？」

責めるように彼女が渋面する。いきなりだらしないところを見られてしまつた。

「いや、ちょっと、昨日は色々とあつて疲れてたから……」

苦笑しつつも弁解するが、拓海はしまつたと思った。「色々」とは軍曹の放送ジャックや新しい管理人騒動も含まれるが、彼女に告白を断られたことが主だ。そんな気まずい話を本人の前で行つたことに、拓海は申し訳なさと、男としての情けなさを感じてしまう。

「そう……」

彼女の方も自分の失態に気付いたようで、バツが悪そうに口をつぐんでしまつた。

朝一番、誰もいない廊下によそよそしい雰囲気が流れた。互いに声をかけようとするが、躊躇いが邪魔をする。

このままではいけない。

拓海はなんとか空気を変えようと、勇気を出して話題を振つた。

「そ、その髪型、似合つてるね。いつもの真面目な感じもいいけど、ボーネールも垢抜けた雰囲気で好

言つていて、後悔の念が押し寄せた。

一体何をのたまつているのか。振られたばかりの相手を口説いでどうするというのだろう。拓海は激しく自分自身に呆れていた。

その空気を察してくれたのか、彼女は場を立て直すよつてコホンと小さく咳払いをする。

「浅神荘のこと、教えてくれるんでしょう？ 一條くんが指示してくれないと私、管理人として何をすればいいかわからないわ」

細腰に手を当て、彼女は困ったような表情を浮かべた。

管理人。そう彼女は浅神荘の管理人になつたのだ。拓海は夢であればいいのにと思っていたが、残念ながら否定しようのない事実らしい。

わざわざ自分から訊ねてくる辺り、彼女のやる気が垣間見えた。ラフな服装を選んだのも、髪を結つて身軽にしたのも、どうやら管理人としての雑務をこなすためのようだ。竹箒までしつかり携え、東雲さつきは既に管理人モードだ。

それでも拓海には疑問があつた。私服を笙子に借りたということは、つまり彼女の自分の服を持ってきていない。昨日の様子を思い出しても、持ち物は学生鞄と竹刀だけ。長期外泊の準備はまるで見られなかつた。

それが意味するのは、突発的な行動。

急遽、彼女は管理人になつたのだ。だから何の準備もしてこなかつた。できなかつた。

それが意味するところは 。

その予想を、しかし拓海は打ち消した。彼女の個人的な事情に踏み入る勇気がなかつた。それに彼女と竜一との間に一体何があつたのか、とても聞けた心境ではない。

「えつと、ごめん。じゃあ……とりあえず建物のことを案内するよ」なるべく目を合わさないように、拓海は部屋を出た。散らかつた室内を隠すため、扉もすぐ閉める。

「二階にはもう行つてみたのかな……？」

拓海はたどたどしく訊ねた。以前から彼女との会話には緊張したが、告白以降はよけいに当惑してしまつ。

「ええ。一応間取りを確かめておこうと思つて」

すぐに優等生的な答えが返ってきた。独力でもやれることはやつておこうといつのか。それだけで彼女の責任感が伝わつてくる。

「じゃ、じゃあ、大体はわかるよね。うちは一階建ての木造アパートで、一号室から八号室まで、計八つの部屋がある。一号室に竜二兄。二号室に僕。三号室に笙子姉の部屋があつて、東雲さんが使つてるのが四号室」

口の中が渴きつつも、拓海は順々に部屋の扉を指さした。各扉には表札がわりのプレートが画鋲で掛けられている。竜二、拓海、笙子と、下の名前だけが記され、それぞれ部屋の主を示していた。当然ながら、さつきのプレートはまだない。

「一階の五号室には空太兄。六号室に軍曹が住んでる。あと二つは空き部屋なんだけど、あんまり近づかない方がいいかな……」

「どうして？」

不思議そうに彼女は両目を瞬かせた。

「ちょっと、人外魔境的なものが……」

拓海は詳しくは説明しなかった。あそこには思い出したくない記憶が山のようにある。彼女は怪訝に柳眉を顰めていたが、構わず拓海は案内を続けた。

「トイレは一階と二階に一つずつ。洗濯機は二階に。ごみ捨て場は外に出て建物の東側。それとお風呂場は離れにあるんだ。入浴時間は一応決まってて、八時から九時が男子、九時から十時が女子。まあ、あんまり誰も守らないけどね……」

「年頃の男女が一緒に暮らしているのに、きちんと守られたルールがないの？ それじゃあ山梨さんは気が気じゃないじゃない」怒ったように彼女が述べる。どうやら女性の権利が不当に低いと思つてているようだ。

「いや、うちに笙子姉の入浴を覗くとする命知らずはいないよ……そこはみんな注意してるし、そもそも笙子姉はあんまりお風呂入らないから」

彼女が口をあんぐりと開けて絶句していた。

「いや、仕事があまりに忙しいからだよ！ 珠子姉はほら、漫画家だから！」

笙子の名誉のため、一応事情を補足する。もちろんそれは本当のことだが、笙子のずぼらさが一番の原因だとは言わなかつた。

「漫画家さんって大変なのね……」

「どうせ更にリバーオークなんとか納得してくれたようだ。

でも今は東雲わんかしるから  
ちゃんとみんなにやがておぐよ

「お願いするつ

彼女はやや不安そうな顔をしていました。浅神莊の異常を、少しづつ理解し始めているようだ。

つ理解し始めているようだ。

あと  
僕たちは未成年には門限がある  
夜は八時以降に外に出ない

夜中ときた。拓海が思う以上に、彼女は折田正しい生活を送つて  
いるらしい。

「それと食事は当番制で、毎日交代で昼と晩の料理を作る」

「ム、料理が上手なーの。」  
そう告げると、なぜか彼女は硬直していた。もしかして

利……料理などて作れなしけ」

で、拓海は思わず見惚れてしまった。しかし彼女はそれを別の意味に取つたらしく、ひどく憤慨する。

「ずっと剣道の」としか考えてこなかつたんだから仕方ないでしょ

「…」  
こうして話していると忘れててしまうが、彼女は生糸の剣道少女だ。日々部活で鍛錬に勤しみ、噂では学外の道場にも通っているという。なら料理が不得手でも仕方がないし、今日日料理が得意な女子高生も少ないだろう。

だが必死に弁解する彼女を、拓海は改めて可愛いと感じてしまった。振られてしまつたのはれつきとした事実だが、やっぱり拓海は、彼女の方が好きなのだ。

「安心していいよ。食事の当番は月曜日が僕、火曜日が僕。水曜日

が僕で、木曜日も僕。さりには金曜日の当番も僕で、ついでに書つと土日祝日も僕だから」

笑いながらそう教えると、彼女はぽかんと口を開けていた。

「それってつまり……」

「料理は毎日僕が作るから大丈夫。お店の味には到底及ばないけど、この半年間毎日作つてたら多少は上達するよ……まあ正確には作られたんだけどね」

入居当初、料理などまったくしたことがなかつた拓海は、雑用係として食事当番まで言いつけられ、途方に暮れていた。「こんなもん食えるか」と竜一に足蹴にされながら、それでも文句を言われない程度のものは作れるようになつた。これも思い出したくない記憶の一つだ。

「一条くんつて、案外すごいのね」

「そんなこと……ないよ」

案外という言葉に内心傷つきながら、所詮自分はその程度の認識だつたのだと、半ば諦めたように彼は肩を落とした。

「……その他の細かいルールは竜一兄の部屋の前にある貼り紙を見ておいて」

拓海は角部屋に当たる竜一の部屋を指し示した。扉に一枚の貼り紙がある。浅神荘十七ヶ条と呼ばれているものだが、内容が煩雑なので把握はあいおいでのいいだろう。

「それと肝心の管理人の仕事なんだけど、一番大事なのはここを荒らさないこと」

「荒らさない？」

曖昧な物言いに、彼女は疑問を浮かべていた。

「えーっと……どう説明したらいいかな」

拓海本人も何を言えбаいいかわからず、言い淀んでしまう。思つたよりは会話も進んでいたが、また二人の間に沈黙が流れた。

スズメのさえずりが聞こえる。夏休みということもあって、外では子供たちの遊ぶ声は響いていた。

対照的に、アパートの中は静寂に包まれている。

昨日の騒ぎが嘘のように、午前中の浅神荘は静かだ。

「今は私たちの他に誰もいないの？」

彼女がそう思うのは自然だ。それだけ今の浅神荘は静まり返っている。

「いや……この時間はみんな寝てるんだ。軍曹は夜行性だし、笙子姉も締め切り後はなかなか起きてこない」

三号室に目をやる。今も彼女は夢も見ずに熟睡していることだろう。

「そういうえば私に服を貸してくれた後、山梨さんは死んだように眠つて、何も反応しなくなっちゃつたんだけど……」

青ざめた顔で彼女が言った。もしかして本当に死んだと思つているのだろうか。

「締め切り前の修羅場度合いにもよるけど、脱稿後は丸一日起きてこないこともあるよ」

苦笑いを返す。十時過ぎの起床でも快く思つていなかつた彼女だ。そんな破綻した生活は想像もつかないだろ。

「じゃあ他の人は？」

「空太兄は普段ずっと部屋の中にひきこもつてゐるから、何をしてるかはよくわからないな……竜一兄は仕事で帰つてこないし、あとこの時間に起きてるとしたら」

拓海は窓の外に視線を移した。

気付けばいつの間にか、外が騒々しい。何やら動物たちの鳴き声が聞こえている。

「浅神さま……かな」

耳を済ましてみると、それらはすべて、猫の鳴き声だった。

## 猫、猫、そして猫

二人は玄関の外に出ていた。午前中の陽気はまだ優しい。だが日が昇るにつれ気温は加速度的に上昇していくだろ。今日は夏休みの初日だ。

「東雲さんは浅神荘の噂を知ってる？」

躊躇いがちに拓海は訊いた。この街の人間ならば誰でも知っている噂の数々。拓海と同じ高校に通う彼女ならば、当然耳にしたことがあるだろう。

「宇宙人がどうとか、言葉を話す猫がどうとかいうあれのこと？ 聞いたことはあるけど、どうしてみんな信じてるとかわからないわ。まるで真実味がないもの」

彼女は真剣な面持ちだった。当たり前だが、浅神荘の噂について懐疑的な人間も多い。彼女もまたそのうちの一人のようだ。

「そうだよね…… 真実味なんて欠片もない。宇宙人なんているかどうかわからないし、神様も非現実的だ。こんなところに元傭兵もない。せいぜい笙子姉が漫画家だつてことくらいかな、現実味があるのは。でもそれが全部本当だとしたら、東雲さんはどうする？」

「どうするつて……」

彼女は戸惑っていた。心なしか視線が痛い。実際、何を言つているのかと思われているには違ひなかつた。

「今のは忘れていいよ。大事なのは管理人としての仕事だから」

拓海は話題を切り替えた。どのみち後でわかる話なのだから。

彼は石壙の上に視線を移す。そこに一匹の仔猫がいた。浅神とは違う、真っ白な猫だ。小さな前足で鬚を入れしている。

「野良猫……？」

それを見た彼女は小首を傾げた。すると人間を警戒したのか、白猫は壙を伝い、トコトコと建物の向こう側に行ってしまった。

「今の猫と管理人の仕事に、何か関係があるの？」

「まだ彼女は釈然としないようだが、その答えを言つ前に、拓海は歩き始めていた。行き先はアパートの敷地外なく、敷地内だ。

「裏庭に行けばわかるよ」

「裏……庭？」

正面をぐるりと回り、拓海は建物の反対側に向かった。後ろからさつきもついてくるのがわかる。

乱雑に伸びた雑草を払いながら進むと、徐々にその音が響いてきた。獣の鳴き声だ。それも複数幾重に聞こえてくる。

「な、何の声？」

予想外にも彼女は逃げ腰だった。さすがの東雲さつきも、この状況にすぐ馴染むことはできないようだ。それだけこの声の波は異様だつた。まるで合唱だ。

浅神荘の敷地は狭い。さういひしているうちに、彼らは建物のちゅうじい反対側に出ていた。

そこは石垣に囲まれた何も無い空間、一般的にいえば裏庭と呼ばれる場所だった。

「猫……」

彼女の口から驚きの声が漏れていた。

その言葉通り、裏庭には猫がいた。

一匹や二匹ではない。辺りは猫で埋め尽くされていた。

草むらに、木の上に、塀の上に、縁側の上に、雨どいの上に。見渡す限りに猫がいた。黒猫、白猫、シャム猫、ブチ猫、キジ猫、トラ猫、エトセトラ。パツと見てもペツトショツブより種類は豊富だ。猫アレルギーの者がこの場にいたら発狂するのは間違いない。総勢數十匹の猫が浅神荘の庭に集まっている。

一人に気付いた猫たちはおののに鳴き声を上げた。何匹かは毛を逆立てて警戒心を示している

異常。この数の猫が一斉にこぢり見る様は、もはや怪奇的ですらあった。

「か、飼つてるの？」

引きつった彼女の顔に動搖が見て取れた。

「まさか。竜一兄の言つたこと覚えてる？ 一人で協力して近隣住民の苦情を解消しろつて」

ややあつて、彼女は信じられなにような目を向けた。

「本当に……？」

『敷地内で飼い慣らしている野良猫たちをどうにかしろ』

昨日、竜一が役所からの書類を読み上げたとき、彼女はおそらく廊下で待機していたはずだ。その内容も聞いているだろつ。近隣住民から寄せられた苦情には、この野良猫たちのことも含まれていた。近隣にとつてこの猫たちは迷惑の対象なのだ。

「管理人の業務は浅神荘を荒らさないことつて言つたよね。そしてこの野良猫たちは、その浅神荘を荒らすものなんだよね……」

言つていて拓海自身も氣後れした。竜一の命令は、彼女と協力して浅神荘への苦情を解消すること。この野良猫たちの問題は、二人で解決しなければならないのだ。

「荒らすつて……」こんなに小さい子が？

見ると彼女の足元に先程の白猫がいた。仔猫なだけあつて見た目も愛くるしく、人々の生活に害を及ぼすようには見えない。彼女はその場に屈み込んで、白猫の頭を撫でようとした。

だが白猫はその手を素早くかわし、草むらの陰に隠れてしまった。

「 我らは神聖な存在ゆえ、人間とは慣れ合わんよ」

しわがれた声だった。初老の男性のよくな口調で、どこからか声がする。

いつの間にか、正面の塀に浅神がいた。水際立つて存在感を放つ三毛猫。毛並みは整つていなが、黒、赤、白と色の並びは良い。ちょうど一人を見下ろすような形でこちらを見据えている。

「誰！？」

彼女はまだきょろきょろと周囲を見回していた。声の主を探しているのだ。

「おなじよ。ワシはここじや。逃げも隠れんもせんて」

その呼びかけに彼女の表情が固まつた。

「猫が……しゃべつてる……」

まぎれもなく、声は浅神から発せられている。

「驚いたか？ それともそなたも、言葉を話せるのが自分たち人間だけなどと驕つていいのではなかろうな」

浅神はひょいと壙を飛び降りた。四足でのしのしと彼女の前に歩いて座る。

その様子を見ながら、彼女は目を田黒させていた。

「言葉を話す……猫」

浅神荘には人語を解す猫がいる。

そこにきて初めて、彼女は例の噂に思い至つたようだつた。

「えーっと、なんて説明したらいいかな……その、浅神さまは神様なんだ。だから人間の言葉がわかるし、頭も普通の猫よりいい「普通の猫よりではない。ワシは全知全能。この世にあるどの存在よりも明敏じや」

「一体何を言つてゐるの……？」

彼女はまだ状況が整理できずにいた。当たり前といえど当たり前なのだが、それでは事態が進展しない。

「浅神さま、自分が神様だつて何か証明できないかな。このままだと話が進まないんだ」

なんとかできないものかと拓海は懇願した。浅神は億劫そうに目を細め、居住まいを正した。

「まるで見世物のようで癪だが、それでしかワシの偉大さが理解できぬのなら仕方ない。神的存在として、そなたら下級存在に譲歩してやうひ」

ずいぶんと偉そうな前口上を述べた後、浅神は默想した。

猫たちの鳴き声が止み、裏庭は一瞬にして静寂に包まれた。何が起きるのか、本能的に彼らは察しているのだ。

しばらくして、目の前の空中が煌々と輝き出した。一箇所に集まつた光は形をなし、それからボール状の白い塊となつた。やがて輝

きを失つたそれは、重力に引かれて落下した。

東雲さつきの頭上めがけて。

「きやつ！」

塊は粉末に散つた。辺り一面に白い煙が拡散する。幸い衝撃は大したことなさそうだが、彼女の髪も衣服も、一瞬にして粉まみれになつてしまつた。そのあつといつ間の出来事に拓海は絶句した。

「真つ白つ……何なのこれ！」

バサバサと粉を払いながら、彼女が不満の声を上げる。

そんな彼女の反応をあざ笑うかのように、浅神は粉の正体を告げた。

「マタタビじや」

「……へ？」

一人して、素つ頓狂な声が出た。

とたんに周囲にいた猫たちの様子が急変した。ひどく興奮し、彼女を中心にして大量の猫が群がつてくる。

「まさか……」

彼女は青ざめた。拓海も青ざめた。

逃げ出そうにも、二人は余すところなく包囲されていた。

悪寒が走る。その後に待つているのは、不可避の事態。

一匹の猫が躍り出た。それを合図にして、数十匹もの野良猫が一斉に彼女へ飛びかかつてくる。

群れというにはあまりに多すぎる、獣の集団。そんなものが一人の少女に群がつた場合どうなるか、拓海には想像もつかない。さすがに咬みつかれはしないだろうが、マタタビで正氣を失つた猫たちは、彼女の体を揉みくちゃにしてしまうだらう。

嫌がる少女を隅々まで舐め回す獣たち。

想像していく、拓海は少し唾を飲んでしまつた。

「何考てるんだ、助けないと！」

急いで猫に立ち向かおつとした拓海は、それが無用の心配であることを悟る。

太刀一閃ならず、第一閃。

持っていた竹箒を素早く横薙ぎにした彼女は、先遣隊である十数匹の猫を一度にすべて払い飛ばした。

少年は剣豪を見た。

まじめことなき武士の剣閃。拓海とは明らかに異なる、戦う者の勇壮だ。

剣道にこんな豪快な横薙ぎはないのではないか、という疑問さえ湧かず、彼はただ彼女に見惚れていた。

「てやああああああああ！」

鬼神のじとき速さで、東雲さつきは群がる猫を次々と薙ぎ払った。もはや竹箒は武器である。掃除道具ではない。一度飛ばされた猫は、正気を失っていたという記憶さえ失い、みな一目散に逃げ出していった。

ほとんどすべての猫が退散し、最後には例の白猫だけが残つていた。

対峙する少女と猫。

白猫に襲いかかつてくる気配はない。それでも彼女の闘気は消えなかつた。

白猫のつぶらな瞳が、少女を捉えていた。まだ生まれて間もない小さな仔猫だ。

「東雲さん、もう大丈夫じゃないかな……」

そのあまりに壮絶な光景に、拓海は臆しつつも声をかけていた。

「そ、そうね……」

彼女は我に返り、ようやく箒の構えを解いた。だがその瞬間、白猫は一目散に逃げ出していた。

「あ……」

白猫の姿は完全に消え、彼女は寂しそうな表情を見せた。

「また、やつてしまつた……」

後悔に俯きながら、彼女は竹箒を胸に抱いた。先程の戦闘態勢とは一転、すっかり彼女は脱力している。一体どうしたのだろうか。

「浅神さま！ 何してくれるんだよ！」

拓海は振り返って抗議したが、浅神はいなかつた。浅神だけではない。數十匹いたはずの野良猫はもう一匹として残つていない。あの惨劇の後では無理もなかつた。

「東雲さん、大丈夫？ 怪我とか？」

「大丈夫」

駆け寄つた拓海を彼女は制した。

「でも……」

「大丈夫だから、私に管理人として何をすべきか教えて」  
彼女は必死だった。まるで何かの失敗を取り戻そうとするかのように、素早く思考を切り替えていた。

「そうだな……」

その様子に心配なところはあるが、拓海はひとまず、マタタビまみれになつた彼女を見てこう言った。

「とりあえず……お風呂入つた方がいいんじゃない？」

## 在りし日の出来事？

一条拓海が東雲さつきに出会ったのは、奇特な場所でも、特別な瞬間でもない。

新入生のクラス分けで、たまたま同じクラスになつただけだ。もしそれが運命だというなら、同クラスの男子二十名全員が彼女と運命的な出会いをしたことになる。拓海は運命は信じない。今までの人生でその言葉がプラスに働いたことがないからだ。

彼女は生まれながらの剣道少女だった。

聞けば物心ついた頃から剣の道を進んでいたというし、勉強と剣道以外にはあまり時間を割かないという。放課後の部活が終われば道場に通い、帰りはいつも遅くなる。遊ぶ時間はないし、人付き合いもあまりしない。昼休みに誰かと弁当を食べる姿を、拓海は一度も見たことがなかった。

かとつて彼女は嫌われているわけではない。むしろ逆だ。憧れられている。

文武両道。才色兼備。

これほどこの言葉が似合う少女もいないだろう。

剣道部の入部当初に上級生全員を倒したという逸話は有名だ。剣道の新人戦では全国大会にも出場した。

部活があまり盛んではない彼らの学校では、全国大会出場というだけで注目を浴びる。たとえ彼女と直接関わりのない生徒でも、その存在は認知しているだろう。その上、容姿も群を抜いているのだから、羨望の眼差しを受けるのも不思議ではない。

なおかつ、新入生代表の挨拶も彼女が務めた。

年度ごとの代表は首席合格者に任せられる。彼女は受験もトップだったのだ。東雲さつきは勉学にも手を抜かない。要するに完璧なのだ。

要するに、拓海とは真逆だった。

自分にはないものを、全て兼ね備えた存在。

時にそれは嫉妬心にもなるだろうが、拓海の場合はひねくれず、まっすぐに想いが募つた。憧れが恋に変わる瞬間は偶然でよかつたのだ。

拓海は以前、早朝の教室でたまたま彼女と一人きりになつたことがある。彼の登校時刻は他の生徒よりもだいぶ早い。一般的な生徒に比べて一時間は早く校門をくぐる。理由は浅神荘から出てくる姿を誰にも見られたくないからだ。拓海は自分が浅神荘の関係者であることを誰にも話していない。

剣道部は朝練があるので、彼女が教室に入るのはいつも始業ベルの少し前だつた。しかしその日に限つて、彼女は朝早く教室に訪れた。

「おはよう」

先に挨拶したさつきだつた。

教室に入り、拓海の姿を見とめた彼女は、わずかばかりに驚いていた。こんなにも早くクラスメイトがいるとは思わなかつたのだろう。

「お、おはよう……」

不意打ちを食らい、拓海はぎこちない口調で返した。それが彼女と初めての会話だつたからだ。

「先輩が格技場の鍵をなくして、部室に入れなくなつたのよ。まったく……責任者なんだから管理ぐらいちゃんとして貰いたいものね」聞かれもないのに、彼女は自分が早く登校した理由を話し始めた。意外だつた。彼女とクラスメイトとの会話は、せいぜい二言三言が関の山だつたからだ。こんなに流暢な彼女を拓海は見たことがない。

彼女は一つ隣の机に鞄を置き、椅子を引く。珍しくその動作は荒れていた。いつも沈着冷静な彼女とはかなりの開きがある。

「いつもこんなに早いの？」

「え……その……」

それで会話が終わるものだと思つていた拓海は虚を衝かれた。たつた一言の肯定が言えず、しどろもどろになつてしまつ。

「別に答えたくないならいいわ」

「……そ、そんなことないよ！ そういうつもりの時間なんだ。高校に入つてから早起きする習慣がついちゃつて！」

誤解を招きそうになり、拓海は慌てて否定した。変に明るく映つたかもしれない。本当は早起きの習慣はついたのではなく住人によつてつけさせられたのだが、毎朝の食事当番であることを話しても意味がない。むしろ浅神荘のことがバレる危険がある。

「……そう。いいことね」

そこで会話は途切れた。

それでもやや逡巡してから、彼女は唐突に別の質問をした。

「ねえ、あなたは自分の家に居たいって思う？」

「……え？」

拓海には質問の意図がわかりかねた。これまでの世間話から、わざかばかりの飛躍が見られた。

答えに窮していると、彼女は続けざまに付言する。

「もし自分の家が居たいと思える場所じゃなかつたら、できるだけ早く学校に来て、できるだけ遅く家に帰ろうとするわよね。まだ学校に来ない生徒は、学校に行きたくないからじゃなくて、“家に居たいから”だつて思わない？」

拓海は頭に疑問を浮かべた。

単純に睡眠時間を確保するため、という学生らしい理由も思ついたが、武道の精神を重んじ、規則正しい生活を心がける彼女にはその感覚はわからぬかも知れない。

教室はまだ二人きりだつた。廊下もまだしんと静まり返つている。いつもの感覚からすれば、他の生徒が来るにはまだ十分以上かかるだろう。今朝の二人の登校時刻は、それだけ早かつたのだ。

「僕が早く來たのは、家に居たくなかったからだつて？」

逆に訊き返す。彼女がそう言いたいのはなんとなくわかつた。

「違うの？」

その聲音には少し苛立ちを含まっていた。やつぱり今朝の彼女は荒れている。

あまり刺激したくないと思った。

「うーん、よくわからないな……だつて僕は一人暮らしだから

「え？」

彼女は瞠目していた。一介の高校生が独居することは滅多にない。それに対する驚きだろう。風呂トイレ共用の浅神荘が果たして一般的な一人暮らしのイメージに当たるかどうかは不明だが、形式的には拓海は独立した住所で生活している。

「だから家に居たいとか居たくないとかはあまりないよ。まあ、本音を言えば帰りたくないんだけど……」

拓海は苦笑した。浅神荘の環境を考えれば、誰だつてそう思うだろう。

「その歳で一人暮らしつて、そんなことできるの？」

彼女はひどく驚いていた。気のせいいかなり興味を示している。

拓海はしまつたと思った。あまり根掘り葉掘り聞かれてしまうと、自分が浅神荘の住人だとバレてしまう。学校でも魔窟と呼ばれ恐れられている浅神荘は、良いイメージを持たれていない。もしそこの住人だと知られれば、人々からどんな風に見られるかわかつたものではない。

「まあ、色々と大変だけね」

拓海は言葉を濁した。雑用と引き換えに家賃も生活費も養ってくれる環境は普通ない。アルバイトもなしで一人暮らししができているのは、その恩恵に他ならない。あの住人と付き合つのは、アルバイト以上に大変かもしねりないが。

「不躾なことを聞くけど、帰る実家があつた上での一人暮らし？」  
迂遠な言い回しだった。身寄りがない可能性も考慮し、気を使つたのだろう。

「……う、うん」

拓海は首肯する。だが内心は穏やかではなかつた。実家のことを持ち出すのは、浅神荘のことをひけらかすより抵抗があつた。「じゃあ、あなたにとつてその実家は、自分が居たいと思える場所？」

話が戻される。拓海はまた答えあぐねた。なぜ彼女がその問い合わせるのかわからなかつた。それがいつも彼女ではないことは、傍目にも明らかだ。

「僕にとつて実家は……」

答えを躊躇していると、教室のドアがガラガラと開いた。生徒が登校してきたのだ。

「おはよー」

数人の女子生徒だつた。おおかた途中の通学路で合流し、一緒に登校してきたのだろう。

「おはよう……」

拓海は遠慮がちに挨拶を返した。だがさつきは黙然と前を向いている。こんなにも誰かと会話している姿を、他人に見られたくないのかもしれない。

拓海は答えるタイミングを完全に逸してしまつた。話しかけようにも、彼女はもうその姿勢ではない。

それ以来、一人がここまで多くの会話することはなかつた。彼女は毎日朝練に参加し、朝の教室で会うこともない。

じゃあ、あなたにとつてその実家は、自分が居たいと思える場所？

結局ただの一度も、あの問い合わせに答えることはできなかつた。でももしあのときクラスメイトが教室に入つてこなかつたら、拓海はこう言つていただろう

「帰りたくない場所だよ」

庭先で一人、拓海はつぶやいた。

浅神荘の敷地の一角に、小さな掘つ立て小屋がある。アパートの

離れに位置するその小屋は、浅神荘の浴場だ。

窓の隙間から濛々と湯気が立っている。壁の奥から小さな水音が響いていた。体に浴びたマタタビを洗い落とすため、さつきが入浴しているのだ。

拓海は生睡を飲んだ。覗こうと思えばできるだらう。この建物の構造を彼女はまだ把握していない。

だが彼にそんな度胸はなかつた。嫌われる嫌われない以前に、あの太刀筋を見せられた後で、そんな無謀なことができる人間はいない。

箒で猫を払い散らす、恐ろしいまでの彼女の姿。

彼女は底なしに強かつた。竹箒でさえあれだ。竹刀を持たせたら男が束になつても敵わないだらう。思い出しただけでもぞつとした。彼女を怒らせてはいけない。恋愛感情とないまぜになつて、拓海は複雑な心境だつた。

しばらくすると彼女が外に出てきた。

とたん、ほのかに石鹼の香りが漂う。

着替えがないので服は同じだ。だが湯上りの黒髪は水分を含み、幾束かが頬に張り付いている。肌もそこはかとなく上気し、年不相応に色っぽい。建物で仕切られているが、さっきまで彼女が一糸纏わぬ姿だったことを思い出し、拓海は顔が熱くなつた。

「ねえ、まさかとは思うけど……これ、温泉なの？」

不審そうな顔で彼女は言った。石鹼の香りに加え、それ独特の匂いが鼻腔をくすぐる。

「いや、実は温泉なんだ……」

彼女が没面する。しかしこれは真実だつた。浅神荘の庭にある浴場は、正真正銘、天然の温泉だ。話によると肩こり腰痛に効くらしい。

「どうしてこんな場所に天然の温泉があるの？」

「ごもっともな意見だつた。普通こんな住宅地に温泉は湧かない。

「実を言うと、これも浅神さまの力なんだ」

とたんに彼女の表情が曇った。しゃべる三毛猫という存在だけでも不可思議なのに、その上マタタビまで浴びせられたのだ。浅神への不信感は拭えないだろう。

「信じる信じないは自由だよ。でもとりあえず、問題はあの野良猫たちだ」

浅神荘の庭に巣食う大量の野良猫たち。詳しく数えたことはないが、三十匹近くの野良猫が敷地に出入りしている。

「……何の臭い？」

突然、彼女は自分の鼻を覆つた。言われてみると、いつの間にか辺りに悪臭が漂っている。

「またか……」

拓海は思わず溜息をついた。慣れたこととほいえ、やっぱり嫌なものは嫌だった。

「次は何が起きるっていうの？」

不安そうに彼女が言った。浅神のことといい、猫のことといい、色々と彼女が面を食らっているのは確かだ。

「……ともかく、一旦敷地の外に出てみよう」

仕方なくうるさぎした表情で、拓海は塀の外を指さした。

## 猫たちの跳梁（前書き）

異臭に気付き、敷地の外に出てみた一人は……。

## 猫たちの跳梁

「これが、あの猫たちの仕業なの……？」

敷地の外に出たさつきは渋面した。あまりの異臭に鼻を覆つ。生ゴミの臭いだ。

浅神荘を出てすぐのところに近所一帯のゴミ捨て場があった。ゴミ袋はすべて引き摺り出され、中を食い荒らされている。残飯や生ゴミが辺り一面に散乱し、途方もない臭気が漂っていた。

「あれだけの数がいるとね、もつ惨憺たる有様だよ」

拓海は辟易した。この光景を田にするのはこれで何度田だろつか。「それだけじゃないよ。鳴き声はうるさいし、猫たちはところ構わず糞もする。勝手に集まつた猫なら仕方がないんだけど、あの猫はみんな浅神さまが集めた野良猫たちだから、苦情は全部うちに来るんだ」

説明しながらも彼は呆れていた。これが浅神荘に寄せられた苦情の一つ。野良猫たちの問題だ。

「どうにかならないものなの？」

「どうにかするのが僕たちの仕事だ」

「それは……」

「それは……」

彼女は口もつた。浅神荘の管理人がどうこうのしか、少しずつ理解しかけているようだ。

「鳴き声や糞はともかく、猫たちはゴミ捨て場のゴミを食べてるんでしょ？ ちゃんとした餌をやればどうにかならないかしら」

「それは僕も考えたけど、あの数の猫を満足させる量は用意できなによ……それに餌をやれば、あの猫たちの飼い主が浅神荘だつて認めたことになる。それこそ近隣にとつては迷惑だよ」

野良猫ならばまだ獸害や自然災害と見なされる余地もあるが、飼い猫となるともはやそれは人災でしかない。それで責められるのは他でもなく浅神荘だ。

「でもそれじゃあ……」

「そう。だから僕たちで片付けなくちゃいけない」

拓海はある意味で開き直っていた。生ゴミの日は道路掃除の日。そう自分を納得させてくる。

「本当に……？」

道路の向こうまで散らかったゴミを見て、さつきは少々青ざめている。これを片付けるのは精神的にも体力的にも、こわいからきついものがある。

「なあに、一人ならあつという間だよ」

拓海は明るく言つたが、気休めだった。

そうでもしないと、やつていられないのだ。

「一條くんはいつもこんなことしてるの？」

竹箒で道路を掃きつつ、さつきは訊ねた。竜一から貰つた箒がさつく役に立つた形だ。

「まあね……浅神荘の雑用つて、要するにこうことだから」

「コンビニ弁当の容器を拾いながら、拓海は諦めたよう言つた。拾つたものは片つ端から新しいゴミ袋に放り込む。彼には手馴れた動作だった。プラスチック容器は生ゴミの日に出す物ではないが、猫たちが荒らすのを見越してルールを破る人間もいる。アパートの周囲は色々な意味で無法地帯だった。もちろん、一番無法なのは浅神荘であるが。

「でも私たちの仕事は近所の苦情を解消することでしょう。こんなことを繰り返していても意味がないわ」

きつぱりと彼女は主張した。その実直さに拓海は思わず鼻白む。

「それは、なんなんだけど……一体どうすればいいのか……」

拓海は情けない表情を返すことしかできなかつた。朝からゴミ捨て場を見張つていたこともあつたが、あの数相手では話にならなかつた。

「そもそもあの野良猫たちはどこから来たの？」

最後の「ミミ」を拾い上げ、拓海は額の汗を拭つた。気温もだいぶ上昇している。蝉の合唱も始まつた。炎天下には辛い作業だった。

「あの猫たちがどこから来たのは僕にもわからない。ただ一つ言えるのは、猫たちは浅神さまの信者だつてことだ

「信者？」

彼女は怪訝した。

「そう。浅神さまは神様で、あの猫はその信者

「そんなこと言われても、易々とは信じられないわ」

彼女の声色は険しかつた。当然の反応だつた。

「浅神さまが本物の神様かどうか、本当のところは僕にもわからないよ。僕が浅神荘に来る前から浅神さまはいたし、昔のことともあまりよく知らないんだ。でも浅神荘が不思議な力を使うのも、人の言葉を話すのも事実なんだ。東雲さんだつて見たでしょ？」

「そうだけど……」

彼女はまだ腑に落ちないようだ。

「浅神さまは信者だと言つて、街中の野良猫を集めている。自分が神様であるためには、どうしても信者が必要らしいんだ。前に野良猫たちをどうにかできないかつて抗議したけど、浅神さまは聞く耳を持たなかつた」

「説得はできないってこと？」

「そうなるね」

彼女は首を捻つた。なんとかして猫を他にやる方法を默考しているようだ。

「あ、そういうえば

「何か思いついたの！？」

嬉々として訊ねた拓海を、彼女は軽く睨んだ。少しほ自分でも考えろという意味らしい。拓海は反省してしょげ返つた。

「役に立つかわからないけど、確かめたいことがあるの。もう一度、あの白猫に会えないかしら？」

白猫。アパートを出て最初に見たあの仔猫のことだ。

「必ずいる保証はないけど、まだ体の弱い仔猫は大抵うちの庭にいるよ。行ってみよう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9108x/>

---

浅神莊の奇想天外なウワサ！

2011年11月8日20時28分発行